

令和2年度 第一回企画展

# 富士山と鎌倉道

—御山の入口・新倉—



山梨県立富士山世界遺産センター



鳥居越に富士山を望む

富士浅間神社（富士吉田市新倉）

北面からの富士山への登拝拠点が吉田（富士吉田市上吉田）です。古来、列島各地から頂上を志す多くの道者がこの地に集いました。吉田に通じる道筋の解明は、富士山が世界文化遺産に登録された際にイコモス（国際記念物遺跡会議）から示された「下方斜面における巡礼路の特定」という課題に対するひとつの回答となりうると考えています。当センターでは、山梨県が平成20（2008）年度に開始した富士山に関する総合学術調査研究を継続し、ここ数年はこのテーマに鋭意取り組んでいます。毎年二回開催している企画展は、こうした調査の過程で得られた成果を、いち早くかつ広く知っていただくためのものです。

前々回の「富士山大鳥居」では吉田から頂上に通じる吉田口登山道、前回の「溶岩洞穴をめぐる信仰」では吉田と富士山南西麓を結んだ神野路について、それぞれの調査成果の一部をお示しました。

今回は、吉田へ結節した数多くの道筋のうち、北西方=甲府盆地方面と吉田を結んだルートについて考察してみたいと思います。現在の国道137号の前身にあたります。都と甲斐国府をつなぎ古代官道「甲斐路」に起源し、その後は「鎌倉道」「鎌倉海道」といった名で呼ばされました。河口湖畔の通行が容易になる以前は、東岸の河口や浅川（ともに富士河口湖町）から尾根を越えて吉田を目指したようです。現在では、「新倉河口湖トンネル」が直下を貫き、河口と新倉（富士吉田市）を結んでいます。

新倉は、吉田への西側からの玄関口であったといつてよいでしょう。この地に所在する正福寺・如来寺の両寺は、富士山の山内に信仰施設をもっていました。「吉田の火祭」で知られる北口本宮富士浅間神社の大祭で担がれる「お山さん」（御山神輿）は、江戸時代前半までは、新倉村が用意していたといいます。こうした由緒は、同所が富士山へ詣でる人びとの通過点であったことと無関係では成立しないでしょう。これらの事実を出発点に、新倉と富士山、またここを経由して甲府盆地と吉田を結んだ鎌倉道について考えます。

令和2（2020）年7月

新倉と河口を隔てる尾根から南方に向けて支脈が延びる。その先端に、新倉の産土・富士浅間神社が鎮座する。4・5ページに掲げた地図からもわかるように、剣丸尾と呼ばれる溶岩流越しに富士山を望むことになる。剣丸尾の流下については、承平7年（937）とする説が有力だ。火山活動の沈静を願って、祀られたと考えることもできるだろう。鳥居の額には「三国第一山」と刻む。北面ではこのような額を掲げる鳥居が多い。

## 鎌倉道～相模・駿河と甲斐国中を結ぶ～

この国（甲斐）は南が富士の山に接していて、前に述べたように、ここからだけその山に登るのである。

16世紀後半から30余年滞日したポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリーゲスは、その著『日本教会史』のなかでこう述べる。「日本中から多くの巡礼者」を集める富士山への登拝拠点は、甲斐側にあったというのだ。登拝拠点、それは吉田（富士吉田市上吉田）にほかならない。次ページの地図を見てみよう。江戸から甲州道中を西行し、桂川に沿う富士道をたどる道者が増加したのは、17世紀以降のこと。これ以前は、東麓の相模・駿河国境地帯から三国山稜を越え、あるいは甲斐国中（甲府盆地）を経て御坂山地を越えて、多くの道者がこの地に集った。江戸の道者のなかにも、道了尊（最乗寺、神奈川県南足柄市）や大山（同県伊勢原市）に詣でた後、竹之下・須走（静岡県小山町）経由で吉田に至り、北面から頂上を志す者があった。川口（富士河口湖町河口）の「道者改帳」に名を留める江戸の住人もいる。彼らは、中山道から佐久（長野県）を経由して盆地を縦断、御坂峠に至ったと推察される。

峰々を越え富士北麓を東西に横断する道は、江戸時代には「鎌倉海道」と呼ばれた（「甲斐国志」卷1）。本冊子では「鎌倉道」の称を用いたが、この道は東海道から分かれて甲斐国府に通じた古代官道「甲斐路」に起源する。国道138号・同137号はその後身にあたるが、籠坂峠で駿甲国境を越え、河口湖の東岸を北上する現在の道筋は、はたして古代の「甲斐路」をどこまで踏襲しているのだろうか。東西から吉田を目指した道者の足跡を追うことで、その道筋の追究が可能になると考へた。当センターが進める山梨県富士山総合学術調査研究は、相模・駿河の国境地帯からヅナ峠を越え平野（山中湖村）に通じる道、平野から内野経由で忍草（以上、忍野村）へ抜け鳥居地峠を越えて小明見（富士吉田市）へ達するルートの重要性を明らかにしてきた。昨年の企画展「富士山大鳥居—吉田口登山道の起点—」は、こうした研究成果の一端である。今次企画展においては、御坂峠直下の川口と吉田を結ぶルートについて考究したい。



小御岳（富士スバルライン終着点）より北東方を望む

### 新倉と小明見～富士山への玄関口～

河口から一尾根越えた新倉が、吉田に対する西方からの玄関口にあたるとすれば、東方からのそれは、鳥居地峠を下った小明見である。この両所には、共通点がある。後述するように、新倉に所在する正福寺・如来寺の両寺は、富士山の山内に〔権利〕をもっていた。小明見も同様である。かつて小明見村の住人は、「富士山砂ふるい」および「観音たけ」（富士山頂、伊豆岳）に「小屋地」各2カ所を所持していた（宝暦9年〔1759〕「小明見村明細帳」）。前者の「砂振」は正福寺の「小屋場」があったところで、「八葉九尊図」のほぼ中央に図示される。そこには「アキナイコヤ（商小屋）」が建ち並ぶ様子が描かれ、「こやかす（小屋数）十八間」と注記されていて、登拝期には、道者の世話をすると18軒の小屋が建った。小屋を建てる〔権利〕を、吉田（上吉田村・下吉田村）だけでなく、新倉や小明見の両村がもっていた。こうした事実は、参詣の道者が、これらの村を経由して富士山に至ったという由緒を抜きにしては説明できないのではないかと考える。この点、さらに研究を深めたい。





安養軒

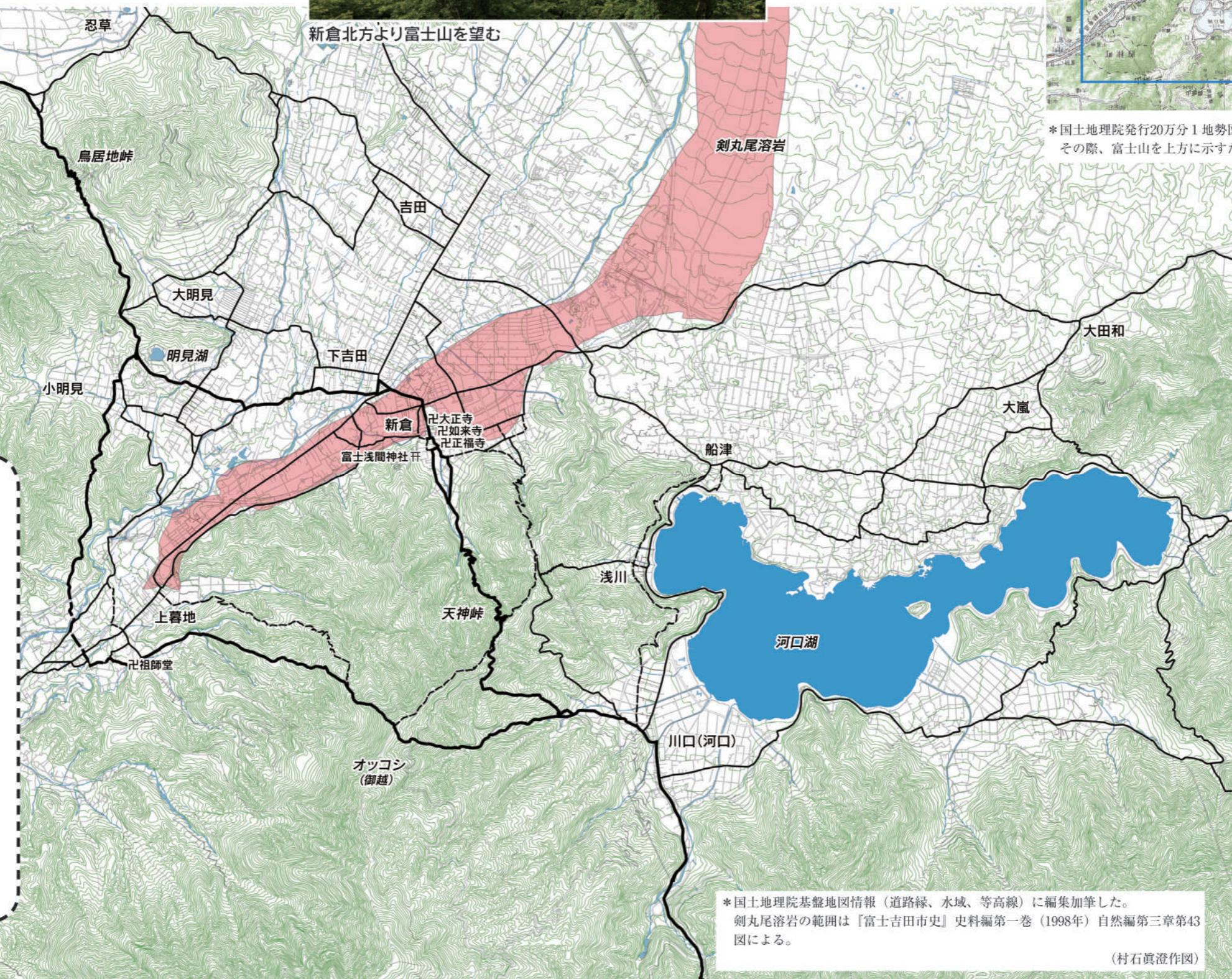
忍野村内野  
伝承では、親鸞が富士北麓へ遊化した際、内野（忍野村）の天野家に足をとどめ、十字名号などを残し、それらを安置するために建てられた堂に始まる。天明8年（1788）からは、11月28日の報恩講（現在は9月28日）に新倉正福寺の住職が導師を勤めることになり、現在まで受け継がれている。



新倉北方より富士山を望む



新倉北方より鳥居地峠方面を望む



\*国土地理院発行20万分1地勢図「甲府」（2012年）に加筆した。  
その際、富士山を上方に示すため、南北を逆転させた。

# 高僧の往来～日蓮と真教～

鎌倉道の往来にかかわり確実な史料に名を留めるのが、鎌倉時代を代表する二名の高僧である。

弘安5年（1282）9月、身延山（身延町）で8年半を過ごした日蓮は、同地を離れ常陸国（茨城県）へと向かった。日蓮一行は、8日昼に出立、11日に御坂峠北方直下の黒駒（笛吹市）に宿をとると、12日には峠を越え河口（富士河口湖町）に至った。その後も「吳地」（富士吉田市上暮地、13日）、「竹下」（静岡県小山町竹之下、14日）などに泊を重ね、18日には武藏国池上（東京都大田区）に達した。病身の日蓮は、これ以上の旅を続けることができず、ほどなく同所で入寂した（以上、「日蓮聖人註画讚」）。死期を悟っていたとおぼしき日蓮は、重畳たる山々を越える必要があるこの道筋を、何故選択したのだろうか。日蓮には、酒匂（神奈川県小田原市）から竹之下、車返（静岡県沼津市）、大宮（富士宮市）を経て富士川に沿って北上した過去があった。鎌倉から身延山へ赴いた文永11年（1274）のことである。池上での滞留を余儀なくされた日蓮は、身延への往路について、峰は高く、谷も深く、川は急流で、道は狭く、「いぶせ」きものであったと回顧している（弘安5年10月7日付「波木井殿御書」）。「いぶせし」とは、恐ろしい、気味が悪いといった意味である。富士山南麓経由の旅程に難渋したとの記憶が、身延山出立を前に日蓮の脳裏によみがえったのかもしれない。御坂山地や三国山稜と険阻な道が待ち受けようとも、多くの供を従えた一行の通行には、北麓を進む鎌倉道が適当と判断したのだろう。

時宗の二祖真教も、日蓮同様に甲府盆地側から御坂峠を越え、河口に一泊している（「遊行上人縁起絵」卷8）。その甲斐における衆生教化の模様は、「縁起絵」の7・8両巻に詳しい。国内には真教を開山に仰ぐ寺院が建立されているが、それらのいくつかが御坂道に沿って所在していることに気づく。笛吹市成田の九品寺（現在は浄土宗）、同市上黒駒の称願寺（黒駒道場）、上吉田の西念寺（富士道場）などをあげることができる。真教の甲斐での活動を永仁3年（1295）のこととする説があるが確証はない。ただし西念寺の由緒が、その開創を同6年と伝えるから（「甲斐国志」卷90）、同僧の甲斐遊化を13世紀末のことと考えることに無理はない。

日蓮・真教両名の事例は、13世紀後半代に、甲斐と東海道を結ぶ道筋として、鎌倉道が最も一般的であったことを物語っている。これ以後増加を続けた富士への道者が、多くこの道をたどったことは疑いない。

## 河口湖畔に伝わる日蓮の足跡

弘安5年（1282）9月12日、御坂峠を越え河口に至った日蓮が宿所としたのは、後に同所で御師となる上野坊（上之坊、渋江氏）であったという。隣家の梅屋采女は、日蓮の高徳に触れこれに帰依すると、自身の兄弟法玄が住職を務める大嵐（富士河口湖町）の御堂寺（真言宗）へ帯同したという。法玄も帰伏し、日領の名を賜るとともに、日蓮宗・蓮華寺に改めたという（「甲斐国志」卷90ほか）。南岸の小立（同町）には、弘安元年の遊化伝説がのこる。日蓮は、帰依した渡辺藤太夫に日長の法名と28枚継ぎの紙に大書した曼荼羅を授けた。日長は庵室を建てたがあまりに狭いため、曼荼羅は兄弟子日法の住持する光長寺（法華宗〔本門流〕大本山、静岡県沼津市）に預けた（「甲斐国志」卷90ほか）。この曼荼羅は、光長寺に伝存し、日蓮筆の曼荼羅としては最大という。なお、小立には、妙法寺・常在寺と、祖師ゆかりの什宝を伝える二カ寺がある。



1「御堂寺改宗」

昭和40年（1965）

蓮華寺蔵  
縦67.0cm×93.8cm

広島県府中市の画家・桑田紫水が、蓮華寺に奉納するために描いた連作「日蓮聖人一代記」の中の一枚。自筆の大曼荼羅に向かって祈りを捧げる日蓮の背景に富士山がそびえ立つ。

## 河口宿の景観

御坂峠を下った真教一行が河口の宿に入していく場面。宿の入口には木戸が設けられ、勧請縄が架かる。道の左右に草葺の建物を描く。手前には妻入の5棟が並ぶ。向かいの木戸寄りの2棟は板敷で、うち1棟は入母屋の屋根をもつ。河口は、官道・甲斐路に置かれた駅に起源する。御坂峠直下の宿として、重要性を増しつつあった。



河口湖越の富士山

山頂に4つの峰、左右の山腹に深い沢を刻む定型化されていない富士山を河口湖越しに臨む。山と湖水の間に森や丘陵を配している。下方の2~3割を湖水に充て、これを俯瞰する。河口東方の尾根上=天神峠あるいはオッコシ（御越）からの眺めをイメージしたものか。

17「遊行上人縁起絵」卷第8（部分） 清淨光寺（遊行寺）

室町～江戸時代（15～17世紀） 写真提供：遊行寺宝物館

全10巻からなる。前半4巻で開祖一遍、後半6巻では二祖真教、それぞれの行状を絵と詞書で綴る。御坂峠を越え、河口に至った真教一行が巻8の第2段に描かれる。真教は「國中利益の後、御坂にかかりて相州へおもむき給」ったという。甲斐国内で衆生を教化した後、「嶮路」「難所」として知られた御坂峠を越え、相模国（神奈川県）へ向かった。日蓮同様、河口で一泊した。御坂峠を甲斐から相模への入口と記しているから、竹之下経由で相模へ抜けた日蓮同様のコースをたどったとみられる。河口宿の出はずれでは、板垣入道との別れを惜しみ袂を濡らす真教と従僧の姿を印象的に描く。この別離の後、入道は館に設けた持仏堂で真教の真影を拝しつつ一心に念佛し、ほどなく往生を遂げたという。富士山の左には、その場面が続く。



祖師堂

富士吉田市上暮地

河口を発った日蓮は、翌日の宿を「吳地」にとった。富士吉田市上暮地には、日蓮を祀る祖師堂が建つ。現在の堂宇は20世紀の建立というが、敷地内には天保11年（1840）の題目塔が遺るなど、この地が靈跡として護持されてきたことを伝えている。また、同所では、日蓮が越えた尾根をオッコシ（御越）の名で伝承している。これにちなんで、祖師堂には御越山遠妙院の称が与えられた。4・5ページに掲げた地図には、尾根から翁沢に沿って下るルートを図示したが、これが赤色で示した剣丸尾溶岩の流れを迂回するものであることに気づく。日蓮や真教が東行した13世紀の後半代には、溶岩上の往来が容易でなかったことを示していよう。鎌倉道の道筋の復元は、登拝拠点・吉田の成立過程の解明にも直結する。さらなる調査研究を期したい。

## 日蓮の足跡が物語る鎌倉道

## 河口から新倉へ～芙蓉亭蟻乗が越えた道～

富士山は多くの登拝者を全国から集めてきた。大坂の鍛冶屋で狂歌師・芙蓉亭蟻乗もその一人である。芙蓉亭は食行身禄の系譜を引く小谷三志が開いた「不二孝」(不二道)に帰依、文政6年(1823)に待望の富士登山を果たす。芙蓉亭は東海道を吉原(静岡県富士市)まで下り、6月11日、大宮の富士浅間神社、白糸ノ滝、人穴(以上、同県富士宮市)に詣でて甲斐国に入る。本栖湖で水行し、西湖の西岸根場に宿をとった。

翌12日、芙蓉亭は河口湖へ向かう。西湖の北岸を進み、河口湖の西岸長浜に出たようである。そして湖の南岸を行き、小立の法華堂前の芝生で休憩、船津で水行している。ここから進路を北にとり、河口浅間神社(以上、富士河口湖町)に詣でる。そこから吉田の町に入るのだが、通常だったら湖を渡る船が浅川経由の陸路で船津まで戻るだろう。しかし芙蓉亭はショートカット作戦に出る。川口から「天神嶺」を越えて、新倉に出たのだ。このルートは地元民の生活道路でもあったが、かつては日蓮や真教も越えた信仰の道でもあった。江戸時代にも富士信仰の道として使われることがあったのである。

吉田御師・小沢伯耆のもとへ宿をとった芙蓉亭は、翌6月13日、明見湖で水行、北口本宮の前を通り神明社に詣でた後、「富士山隨一靈窟母御胎内」を潜る。翌日はいよいよ登山である。6月14日、悪天候に見舞われながらも富士登頂を果たす。小石混じりの雨が吹き上げる中、岩室に逃げ込み、翌日下山する。再び吉田に一泊した後、鎌倉往還で梨ヶ原を突っ切り、山中湖でも水行する。そして籠坂峠を越え、須走口への道標を見るにつけて、富士登拝の体験が思い出されたことだろう。



河口湖の水行場

富士河口湖町船津

河口湖の南東岸に船津溶岩流が形成した岩場がある。ここが同湖の水行場となっていた。



天満天神宮

富士河口湖町河口



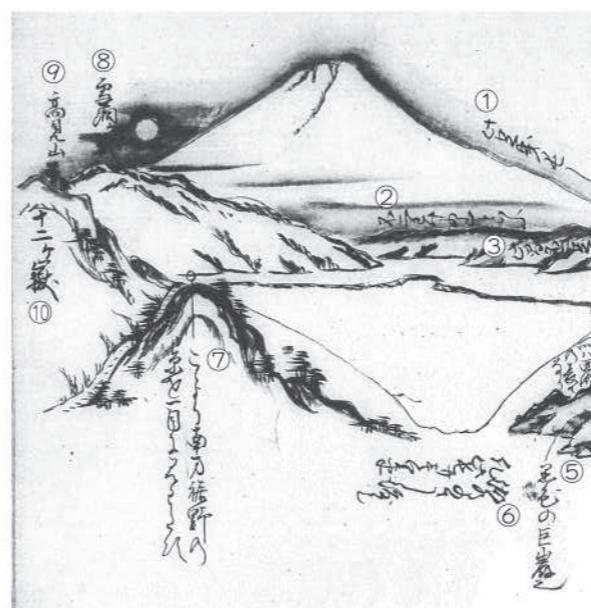
河口湖畔と吉田を隔てる山地(府戸尾根)

日蓮は写真中央の鞍部を「吳地」(富士吉田市上暮地)へ越えた。「オッコシ」(御越)の称がある(A)。これに対し、芙蓉亭は「天神嶺」(天神峠)を新倉へ向かった(B)。天神峠の名は、河口集落の外れに鎮座する「天満天神宮」に由来する。河口集落と稜線との比高は400mにも達する。

### 18芙蓉亭蟻乘「富士日記」

文政6年(1823)

芙蓉亭の祖父は、若い時より思うことあって富士登山を願っていたが、多病で果たせなかった。不二道に帰依した本人も、富士登山はするべきものと思っており、文政6年5月末日、道中の名所見物も意図して、富士山への旅に出る。登山後は、籠坂峠を越え東海道にて、富士の南麓を通り、人穴・根原を経由して再び甲斐に入る。今度は本栖から富士八湖の四尾連湖・精進湖を訪れ、中道往還を行く。そして甲府から甲州道中・中山道を通行して大坂に帰る。本日記にはいくつか富士山のスケッチが描かれているが、北麓に関係するものを3点掲載した。

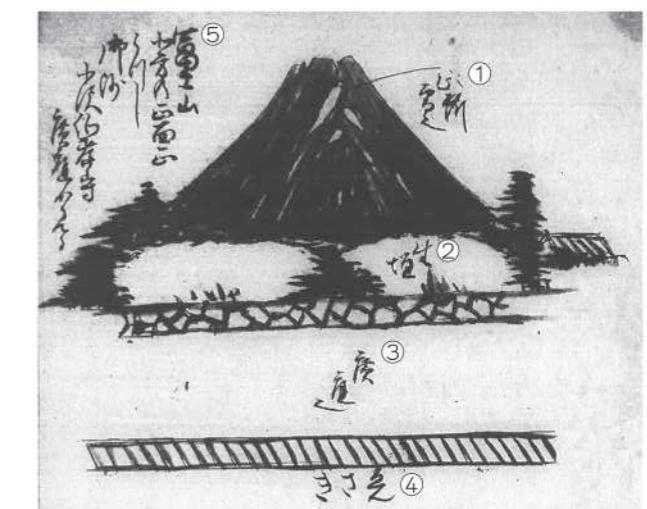


西湖辺の山を打ち越す

- ①此足幾長し ②不二わけの山といふ
- ③此間不二足わけ山
- ④富士うつる所ハ西湖の表てなり ⑤黒色の巨巖也
- ⑥湖水のさし渡シ凡此長サ毫里半
- ⑦こゝより南方裾野の原を一目に見わたす
- ⑧雪洞ヶ嶽 ⑨高見山 ⑩十二ヶ嶽

6月11日に根場に泊まった芙蓉亭は、翌日の朝には、西湖に映る富士をみた。

国にたったひとつの富士の根を  
上下に見るにしの海はら  
と、その時の感動を詠んだ。



御師宅より富士山を見る

- ①此所雪也 ②生垣 ③広庭也 ④ゑんさき
- ⑤富士山北方の正面正うつし御師小沢伯耆守広庭より見る

6月12日、芙蓉亭は河口浅間神社に詣でた後、天神嶺を越えて吉田の町に入る。御師小沢伯耆守に宿をとり、敷地内の小川で水行してから広庭に回り、富士山を見た。



胎内潜を体験

- ①此内靈窟也 ②木草なり
- ③巖の色ハ金氣ありて黒く光る也
- ④ここに石像の大日如来安置す
- ⑤大日の印、右を上へ左を下へなし給ふ、上へ下のちかいハ  
まさしく陰陽おふりかわりとすおほゆ

6月13日、芙蓉亭は明見湖で水行、北口本宮の前を通り神明社に詣でた後、「富士山隨一靈窟母御胎内」を潜る。翌日はいよいよ登山である。

## 浅川と新倉～親鸞遊化の伝承～

富士河口湖町浅川。江戸時代の浅川村は、石高41石余、人口270人の小村であった。隣り合う川口村（富士河口湖町河口）の347石余、1,128人や船津村（同町）の201石余、897人と比較すれば、その差は歴然としている。それもそのはず、同村は古くは川口村の一部で、寛文9年（1669）の秋元氏の検地の際に、一村をなしたものという（「甲斐国志」卷18）。河口湖の東岸にあって、御坂山地から延びる支脈の西側斜面にへばり付くように集落が展開する。一方、その反対側に位置するのが、今次企画展における「主役」の新倉である。現在ではこの両所を画す尾根の直下を、国道137号のバイパスが貫いている（新倉河口湖トンネル）。

浅川・新倉の両所には、浄土真宗の開祖親鸞にまつわる逸話が伝承されている。親鸞は、等々力（甲州市）の万福寺への途次、新倉から浅川に抜け、外川弥兵衛宅に泊まったという。親鸞に帰依した弥兵衛は、その弟子となり、阿弥陀堂を建てた。現在に至るまで、阿弥陀堂を所管しているのは新倉の如来寺である。毎年8月28日には、同寺の住職を導師に法事が執行されている。浅川に暮らす人々と如来寺の関係は深く、同寺の門徒も多い。浅川で死者が出ると、尾根を越えて、如来寺へ伝え、遺体もこの峰を運んだという。このため、峠道には「死人道」の称がある。なお、地内には「祖志入」の字名が伝わるが、これも祖師＝親鸞の伝説にまつわるものという。

河口湖畔と新倉を結ぶルートには、川口からの天神峠（アノ山峠）のほかに、浅川経由のものがあったことにも留意する必要がある。

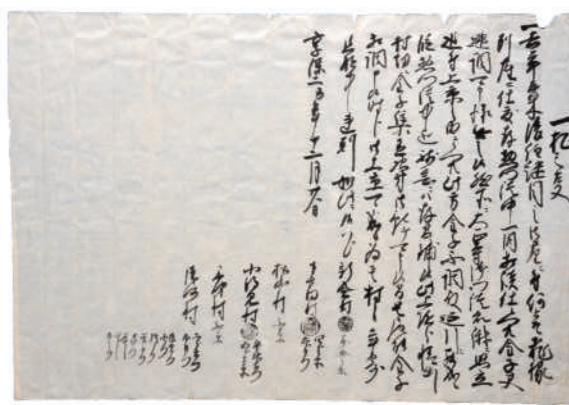


国道137号の傍から東方の尾根を望む

右ページ地図の×地点から東方を望んだ。この尾根の鞍部を越え、新倉に至る。現在、浅川集落の北端（地図A）に所在する阿弥陀堂は、古くは集落のほぼ中央、河口湖の湖岸近くに所在したという（地図B）。B地点には、「阿弥陀堂」と刻む江戸時代後期造立の石碑が立つ。

## 如来寺門徒の悲願～飛檐列座への昇格～

万福寺（甲州市）の支配下にあった万蔵寺が、本願寺の直末になり、如来寺と改めたのは享保3年（1718）である。同時に飛檐列座への昇格も果たしている。当時の浄土真宗には院家・内陣・余間・飛檐・平僧と、本山の法事の際に座る場所にちなんだ寺院の序列があった。ただ昇格には金錢もかかった。そこで門徒は寺のために金錢を集め、連判状をつくった。如来寺住職の継承を機に、飛檐列座を本山の西本願寺から許されるよう、惣門徒中が相談。しかし、金子が早速には調達できずにいたところ、隣の大正寺の門徒も同じように動き、近々上京との情報が入る。これを受け、「随分精出し」村ごとに金子を集めて、首尾よく調達できたら上京することを確認している。この連判状を見ると、寄合には松山村と船津村が欠席、地元新倉村の寄合衆と下吉田・小明見両村のそれぞれ2名が出席していることがわかる。しかし、浅川村からは実に10名の出席である。浅川の門徒の如来寺に対する思いが垣間見えるようである。そして、200両もの大金が集まり、下吉田村の小野六郎左衛門を門徒惣代として京都に送り込むのである。



16如来寺飛檐列座の儀につき金子調方連判状

如来寺藏

享保2年（1717）

縦32.6cm×横47.4cm



浅川阿弥陀堂一座法要

毎年8月28日に如来寺住職を導師として執行される。床の間には、阿弥陀如来像（絵像）と六字名号が掛けられている。写真は令和元年（2019）の模様。



阿弥陀堂

富士河口湖町浅川



浅川要図

富士河口湖町平面図（1/2000、2001年測量）に加筆した。また、富士山の方向を上方に示すため、左方へ90度回転させた。



15浅川村門徒志納帳

元文2年（1737）

浅川村の門徒50人が、如来寺へ志納した金品が書き上げられている。錢のほか、麻や綿といった織維製品での喜捨もある。「妻」「娘」などの記載が見え、女性の如来寺に対する信仰心の強さを見て取ることができる。

綿↓

麻↓

↑勘之丞  
娘  
六右衛門  
小兵衛妻

如来寺藏

縦12.7cm×横31.8cm

## 如来寺と富士山

如来寺は、そもそも真言宗の道場として字「堂面」(堂ヶ尾)に開かれた救願寺から始まったと伝わる。時宗二祖・他阿真教が訪れてからは、時宗の念佛道場となる。その後、法性寺と改称、宝徳3年(1451)に武田一族の穴山信正が常阿と称して住職となり、孫の光重が本願寺蓮如に帰依、淨欽と号し、その際に淨土真宗の寺院になったという。万福寺(甲州市)の末寺という位置づけで、天正13年(1585)には「万」の一宇をもって萬藏寺と改めた。享保3年(1718)、本願寺直末となり、如来寺の寺号を許されている。

聖徳太子信仰とも関わりが深い。太子が駒を留めて富士山駒ヶ岳を拝した靈地ともいわれる。境内には太子堂があり、富士山の女人登山に制限があった時代には、女性はここから駒ヶ岳を拝んだ。富士山七合三勾の駒ヶ岳には、如来寺が管理する太子堂があった。万延元年(1860)版行の『富士山道しるべ』は「太子堂」をあげ、「新倉村萬藏寺持ち」と記している。この堂宇は蓬萊館の付属屋付近に存在したとみられる。寛政8年(1796)、江戸大久保町(新宿区)の十三夜講中は、27歳の太子が甲斐の黒駒に乗り、舍人の調子磨が従う木像を如来寺へ奉納した。さらに同じ形態の銅像も納めた。銅像は富士山中の太子堂に安置され、十五夜の「お座」には、如来寺の住職がそこまで登り勤行した。明治以降、銅像は如来寺へ降ろされたが、現在でも8月には、駒ヶ岳へ運ばれ、法要が営まれている。

## 鋳物師・西村和泉守

鋳物師の西村氏については、香取秀真の『日本鋳工史稿』(甲寅叢書刊行所、1914年)に詳しい。元禄8年(1695)に没した初代から11代にわたり神田鍛冶町にあって鋳物師を家業としてきたという。天明4年(1784)に如来寺が配布した「富士山駒嶽略縁起」には「明和改元申の秋……修復を加へ、太子の尊像を此靈地に安置し奉る」とある。銅像が明和元年(1764)の奉納とすれば、如来寺像の作者和泉守政時は、西村氏の第4代に比定される。ただし、西村氏は幕末・明治初年の当主(9代)まで、みな和泉守、政時を称しているから、作者を確定することは容易ではない。同氏は徳川家康の生母於大の方の菩提寺・伝通院の梵鐘の鋳造を手がけるなど、江戸を代表する鋳物師であったことは疑いない。

なお、記録によれば、甲斐国内でも梵鐘7口を鋳造したという。



6銅造聖徳太子騎馬像

江戸時代(18世紀後半)

像高 43.2cm

江戸神田鍛冶町の鋳物師・西村政時の作。雲をあしらった台座に、騎乗する27歳の太子と従者の調子磨を表す。太子が「甲斐の黒駒」に乗って富士山に駆け上ったとする伝説をモチーフとする。江戸の大久保十三夜講中の奉納で、富士山駒ヶ岳(七合三勾)の太子堂に安置したが、明治初年には如来寺へ降ろされた。平成21年(2009)8月3日、如来寺ではこの像を富士山八合目(旧七合三勾)の蓬萊館まで持ち上げて、法要を営んだ。これ以後も、同寺では毎年この日に「聖徳太子富士登山法要」を執行している。像は太子、馬、馬の尾、調子磨、瑞雲、台座と六つの部材に分けられ、運搬もさほど困難ではない。



## 富士山駒ヶ岳

甲斐国が献上した神馬に跨った聖徳太子が、雲霧を貫いて富士の峰に駆け上がった。舍人の調子磨は疲れを忘れて、これに従った。

諸書が伝える「甲斐の黒駒」の伝説である。吉田口登山道七合三勾の駒ヶ岳の呼称は、この逸話にもとづくといふ。延宝8年(1680)の「八葉九尊図」(資料2)にも、「大イキアイ」(大行合、八合目)の手前に「こまかたけ」と記されていて、ここが早くから信仰上の要地であったことが知られる。19世紀に編まれた地誌や登拝案内書の記述を総合すれば、9軒の小屋が集中する七合目を過ぎたあたりに「聖徳太子ノ像」「銅馬」を安置する小屋が1軒ずつあり、そのひとつを新倉の如来寺が所管していたという。前ページで触れたように、『富士山道しるべ』は、これを太子堂と記述している。



「駒ヶ嶽」と「太子室」

嘉永3年(1850)写の奥書をともなう「富士一山北口明細御絵図面大全」(個人蔵)と題する画集の一葉。「駒ヶ嶽」「太子室」と注記する二つの石室を描いている。右方(東方)に所在する亀岩を画面に収める点は、下掲の絵葉書に通じる。



絵葉書「(吉田口) 七合三勾」

吉田口登山道を特集した絵葉書の一枚。「蓬萊館」の看板を掲げた小屋の左手奥に別棟が見える。この付近に、如来寺持ちの太子堂が所在したと考えられる。背後に映る岩塊を「亀岩」と呼ぶ。1930~40年頃の景観。



如来寺太子堂

2間(約3.6m)四面の正方形の建物。女性が富士山に登れなかった時代は、七合三勾の駒ヶ岳を拝む場所だった。



7木造聖徳太子騎馬像

寛政8年(1796)

富士山の駒ヶ岳に祀られた銅造騎馬像と同様の形態で、彩色が施されている。台座背面の刻銘から、寛政8年5月に、銅像同様に江戸の大久保十三夜講中に奉納したことがわかる。

如来寺蔵

像高42.0cm

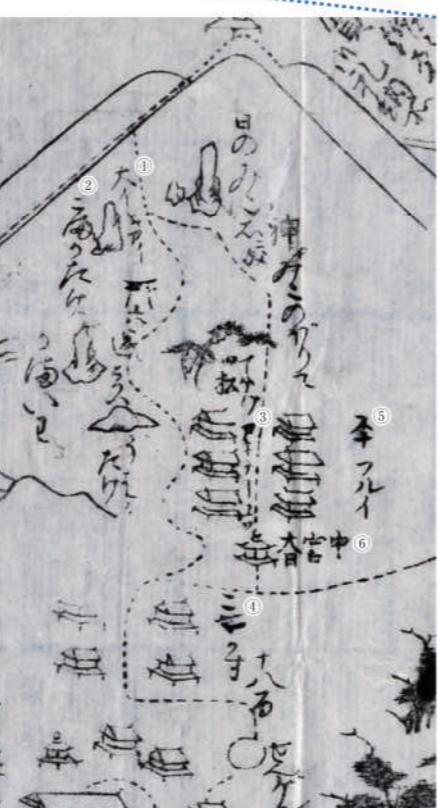
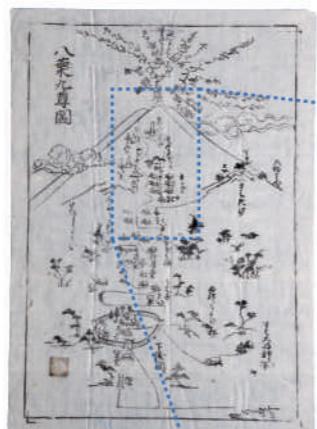
# 正福寺と富士山

平安時代初期、富士北麓を訪れた真言宗の祖・空海は、弟子の道海に新倉地内の「阿ノ山」に富北院を開かせたと伝えられている。安貞年中（1227～29）、第9世道祐の時に平地に移り、そこの字は「道祐」というようになる。浄土真宗に改宗したのはこの時である。その後、「新屋」（富士吉田市）の城山城主・遠山重正が本願寺の蓮如に帰依、出家して乗欽と号し13世となり、現在地に移転したという。もっとも乗欽は新倉の宮ノ下に真宗道場を開いたともいわれ、「甲斐国志」は正福寺と大正寺を「同祖」としている（巻89）。

正福寺は文禄4年（1595）に浅野氏重、慶長9年（1604）には鳥居成次と、郡内領の支配者それぞれより、富士山中腹（中宮、五合目）に小屋一軒を経営する権利を与えられている（資料8・9）。富士信仰と深い関わりができたのである。とくに登拝者が増える60年に一度の庚申の「御縁年」には、護符などを木版で刷って配った。寛政12年（1800）の御縁年には、空海の厄除のお守、八葉九尊と三尊来迎の絵、富士山の縁起と絵図を刷り出した。お守は富士山宝印だった。さらに配る護符の種類を建札に記し、上下谷村（都留市）と下吉田に掲示した。その下書を見た吉田御師の中には、宝印の配布は神職がやることで不適切ではないかと言いくだす者もいたが、谷村陣屋の役人は富士山の「仏名所」は正福寺持ちであるとの見解を示し、問題なく配られた。富士信仰における正福寺の関わりの深さが窺われる。正福寺には、延宝8年（1680）の縁年に際して用意された4種の版本が伝存している。



佐藤小屋より18軒の小屋跡を望む  
富士山五合目

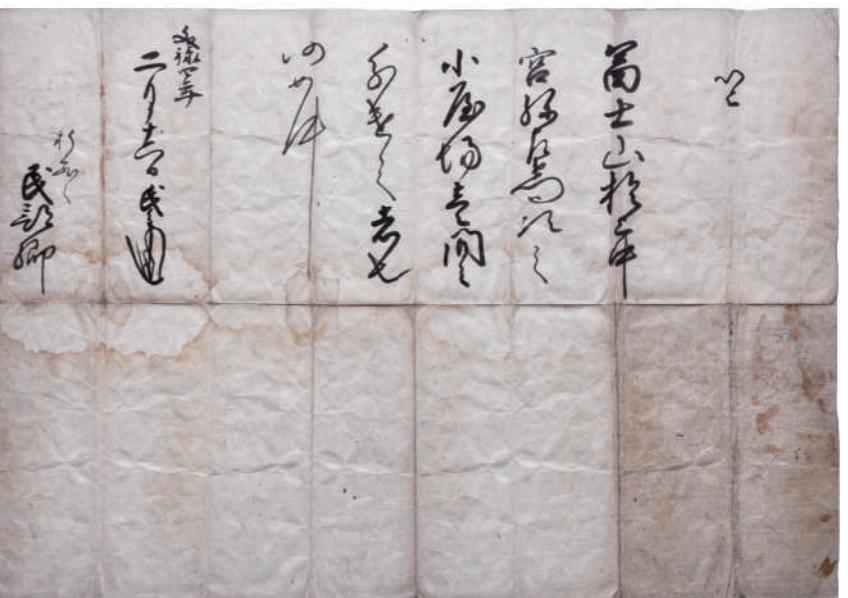


5富士山牛玉宝印版本

延宝8年（1680）全高35.0cm、全幅27.0cm  
厄除けの護符として刷られたもの。版本は八葉九尊図のものと一緒に、空海から富北院を開いた弟子・道淨に与えられたという伝承を持つ。

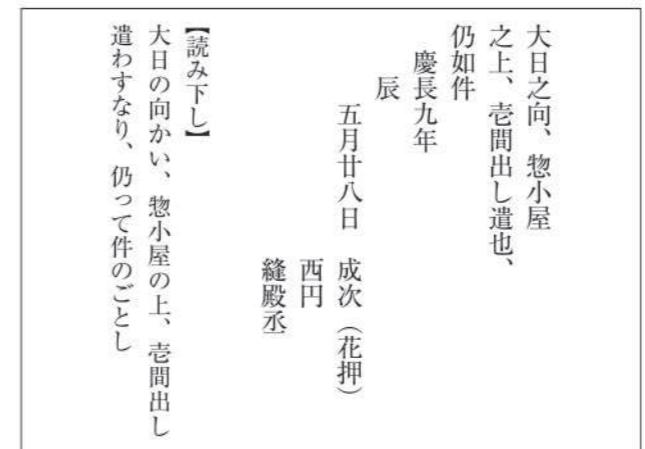
8葉九尊図

延宝8年（1680）以来、正福寺が60年に一度庚申縁年ごとに頒布してきた図様。中宮大日（⑥）の上方に小屋が立ち並ぶ（③）。砂振小屋と総称され、18軒あった。右ページ掲載の2通の判物（資料8・9）が示すように、そのうちの1軒を正福寺が所管していた。この図葉を刷り出した版本が正福寺に伝来する（資料2）。その詳細は、16ページを参照願いたい。



8浅野氏重判物  
文禄4年（1595）

正福寺蔵  
縦34.7cm×横49.7cm

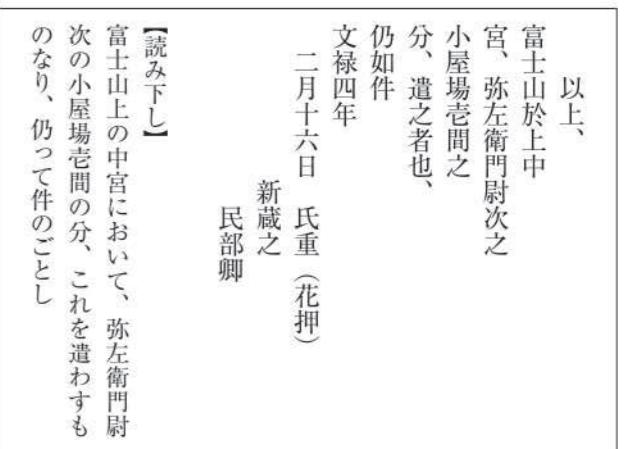


【読み下し】  
大日の向かい、惣小屋の上、壱間出し遣わすなり、仍つて件のごとし

五月廿八日 成次（花押）  
西円 縫殿丞

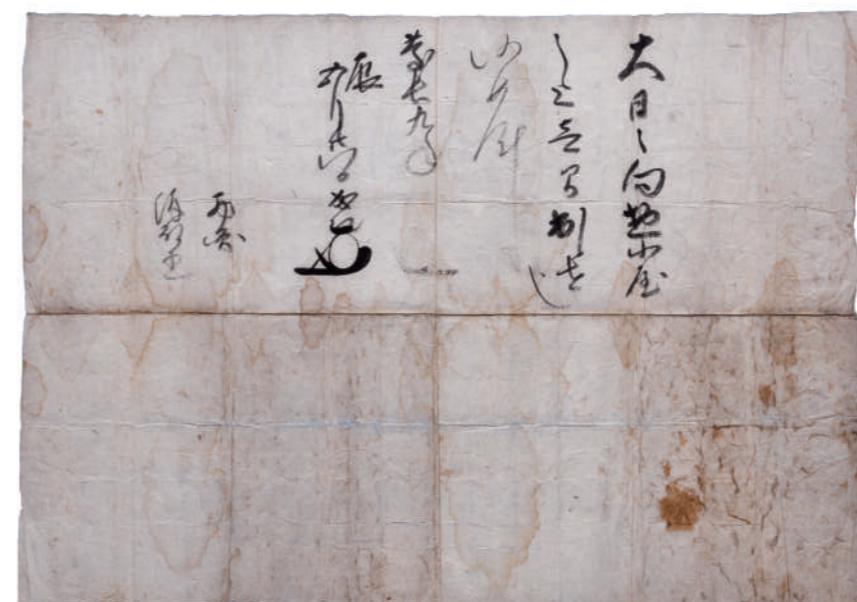
慶長九年  
辰

大日之向、惣小屋  
之上、壱間出し遣也、  
仍如件



文禄四年  
二月十六日 氏重（花押）  
新藏之 民部卿

以上、  
富士山於上中  
宮、弥左衛門尉次之  
小屋壱間之  
分、遣之者也、  
仍如件



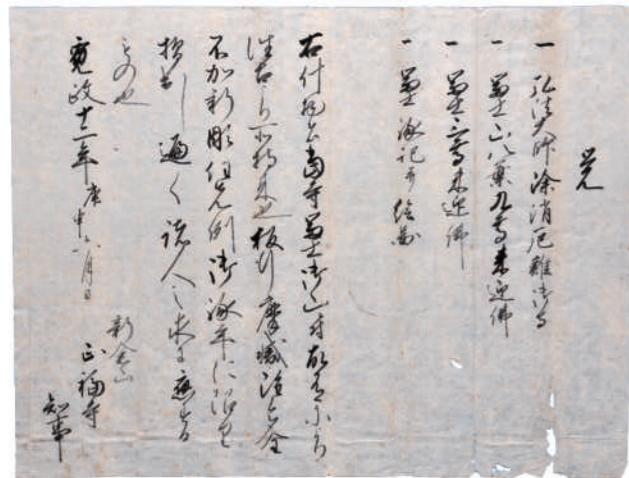
9鳥居成次判物  
慶長9年（1604）

正福寺蔵  
縦33.5cm×横47.5cm

関ヶ原の戦後に郡内の領主となった鳥居成次が、正福寺の西円と縫殿丞に宛てた判物。縫殿丞は西円の嗣子だろうか。浅野氏重が認めた権益（小屋1軒の経営権）の保持を追認したものと理解される。氏重の判物と合わせて、後世、正福寺が富士山に権利を持ち、庚申縁年に刷物を頒布できる根拠とされた。

## ～正福寺と寛政12年の庚申縁年～

正福寺は庚申縁年に上吉田・下吉田（ともに富士吉田市）の両所で「富士山縁起」やお守を頒布してきたという。同寺には、寛政12年の縁年時の古文書が数通伝わっている。正福寺が石和代官（この時期は谷村代官を兼帶）の川崎定安に対し、縁年を迎えるにあたり建札の許可を願い出た文書も含まれている。富士山への参詣者が増える庚申縁年を迎えるにあたり、正福寺ではその周知のための建札を、先例にしたがい下吉田村と上谷・下谷の両村（都留市）に設置することを望んだ。14ページで触れたように、このとき吉田御師との間で相論が生じている。御師との因縁もあり、正福寺側でも慎重に手続きを進めたことがうかがえる。



10富士山御縁年につき正福寺建札下書 正福寺蔵  
寛政12年（1800） 縦31.1cm×横43.3cm

寛政12年の御縁年にあたり、正福寺では、下吉田村をはじめ都合3ヶ所に立札を用意した。本文書からその内容がわかる。冒頭4カ条にわたり、同寺が刷って頒布した札の種類を書きあげている。正福寺にはこれらに該当するとおぼしき版木が4点伝存している。①は富士牛玉宝印（資料5）、②は富士山八葉九尊図（資料3）に該当しよう。④は富士山略縁起（資料4）および八葉九尊図（資料2）とみられる。③については、はっきりしない。後段では、板に摩滅が多いが、「新彫を加えず」「御縁年に限り」と述べていて、行間に御師に対する遠慮が覗く。



2八葉九尊図版木 正福寺蔵 八葉九尊図 正福寺蔵  
延宝8年（1680） 縦43.9cm×横29.5cm 寛政12年（1800）版 縦41.5cm×横31.2cm



3富士山八葉九尊図版木  
延宝8年（1680）

中央に金剛界大日如来像（智拳印）を据え、上部の釈迦如来以下、右回りに觀音菩薩、藥師如來、勢至菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩、阿弥陀如來、地藏菩薩の諸尊を配している。山頂の密教的世界觀を反映した図様である。

正福寺蔵

縦59.7cm×横30.6cm



4富士山略縁起版木  
延宝8年（1680）

正福寺蔵

縦43.1cm×横29.7cm

富士山の由来などを刻む。孝安天皇92年と伝わる富士山湧出に始まり、徐福伝説、聖徳太子や役行者の登山、貞觀の噴火などについて記す。都合13カ条からなり、かなりの長文である。末尾に「今年延宝八庚申のとしまで…」とあり、同年の新調と判明する。八葉九尊図版木（資料2）と法量はほぼ等しく、対をなしていた可能性が高い。建札下書（資料10）の4カ条目で「富士縁起并絵図」と一括されている事実とも符合する。

富士山北面の信仰世界を図化した最古の事例として知られる。登拝拠点の「よし田町」（富士吉田市上吉田）から絶頂（頂上）へと登拝路（吉田口登山道）が延びている。内院（噴火口）を取り囲む高所には、藥師如來（吉田口）以下の諸仏を配している。刷物は上掲の文書とともに伝來した。左方下部に、「正福納所」と刻む19ミリ四方の黒印が捺されている。寛政12年に用意されたものの、何らかの事由により、頒布されることなく、正福寺に伝わった模様である。

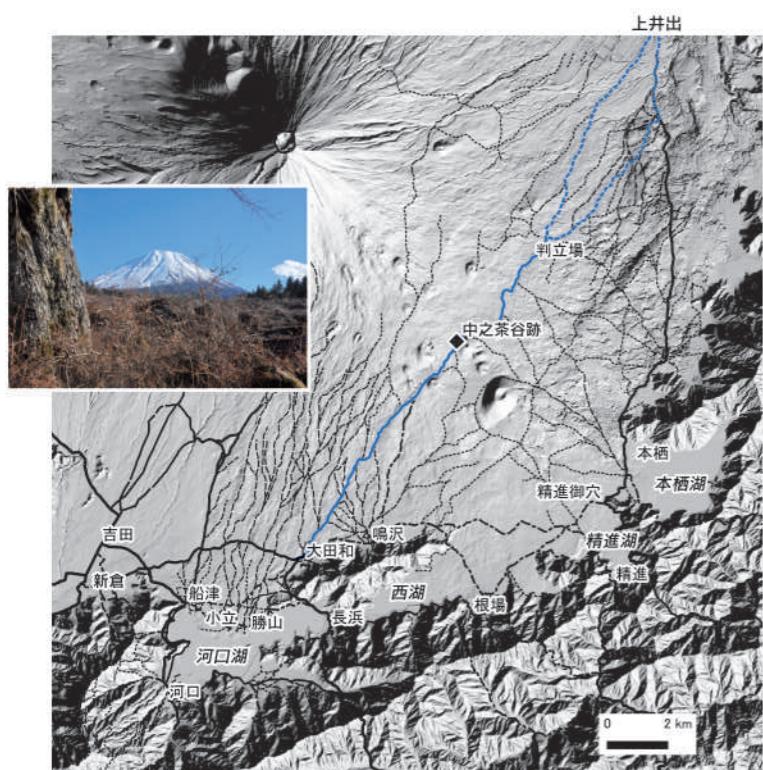


## 大正寺と准如の巡錫

大正寺は文永年間（1264～75）に親鸞の高弟・六老僧の一人である源誓が、新倉の宮ノ下に開いた草庵が前身と伝えられている。また一説に、開基は正福寺と同じく遠山氏の乗欽ともされ、宮ノ下に浄土真宗の道場を開き、真福寺と号したという。宝永3年（1706）に大正寺が書き上げた由緒では、もともと新倉には新念寺という御堂があり、文禄3年（1594）に検地が行われた後、真福寺と改めたとある。寛永4年（1627）に火災で焼失、現在地に移り、寛文8年（1668）には寺号を大正寺と改めた。

元和8年（1622）、本願寺11世の准如が、江戸からの帰りに富士北麓を訪れた。准如は8回、京都と江戸を往復しているが、北麓に来たのはこの時しか確認できない。来訪の理由は、親鸞の足跡をたどるために考えられるが、如来寺の後世の文書によると「富士山御見物」だったらしい。後に大正寺となる寺からは、「富士胎内の靈石」を献上したと伝わる。この准如の北麓入りに際して、新倉の寺には指令が出された。7月14日には「中之こんのう通」（神野路）をルートとして大宮（静岡県富士宮市）に抜ける予定であることを知らせている。北から富士山を眺める目的があったと推察される。8月10日には、明後日に江戸を出立するので、昼食の用意や14日には到着する旨を通達している。

問題は宛名に、万蔵寺（現如来寺）とともに真念寺と真福寺（新念寺）の両方が書かれていることだ。寛永年間（1624～44）に親鸞と准如の御影を受け取ったときの書状には「新念寺」、慶安元年（1648）の法衣着用免許や、明暦元年（1655）の進上物に対する礼状には「新福寺」とある。いずれも「大正寺文書」として伝来している。すると、新念寺と真福寺、二つの寺院が同時期に並立していて、大正寺と改めるときに一つに統合されたとも思える。大正寺の成立には謎があるのである。ともあれ、大正寺は真宗寺院として「新倉三箇寺」の一翼を担い、准如の御影や六字名号などの寺宝を今に伝えている。



准如がたどった神野路

図中の◆付近からは、写真のような富士山を望むことができる。

\*国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。その際、富士山を上方に示すため、南北を逆転させた。

（村石真澄作図）

宝松山大正寺の寺号は寛文8年（1668）に成立するが、もともとは現在地より北、新倉の宮下にあった浄土真宗の道場である。そこは大正寺の前身・水石山新念寺が建っていた場所で、現在それをしめす石碑がある。真福寺も大正寺の前身とされるが、新念寺と同一（後身）なのか、別の寺なのかは判然としない。



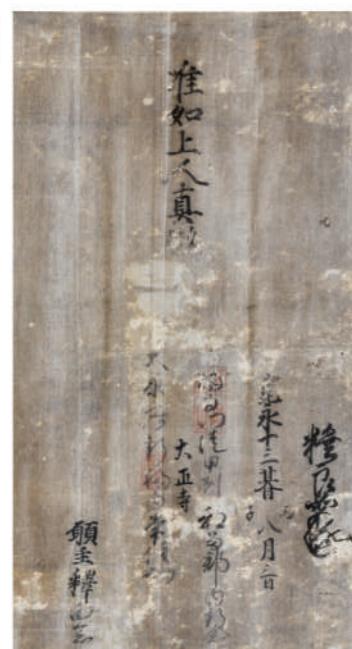
新念寺址

富士吉田市新倉



12絹本着色准如上人御影  
寛永13年（1636）  
縦107.8cm×横49.0cm

11六字名号 准如筆  
江戸時代（17世紀前半）  
縦36.3cm×横16.3cm



准如上人真影	寛永十三年八月三日 万福寺門徒甲州都留郡内新倉 願主釋迦
大正寺	大原庄新福寺常住物 大正寺

本願寺11世の准如は、織田信長と戦った顕如の三男。父の死後、豊臣秀吉の命により本願寺宗主を継いだ。慶長7年（1602）、徳川家康の支持により、兄教如が東本願寺を起こし、ここに本願寺は東西に分裂した。その後、准如は大阪や江戸に「御坊」を建立し、西本願寺の教義拡大に務めた。表装は改められているが、原裏書がそのまま背面に貼付けられ、今に伝わる。これにより、准如の子良如（本願寺12世）から寛永13年（1636）に時の住持西念が下賜されたものであることがわかる。本御影は、上洛した江戸麻布の善福寺に託されて、東海道の三島（静岡県三島市）まで運ばれた。善福寺が、三島まで来て受け取ってほしいと「新念寺」に連絡する書状が伝来する。一方、裏書には「新福寺常住物」とある。新福・新念の二寺が併存していたのかどうかはつきりしない。

浄土真宗においては、阿弥陀如来像（木像や絵像）とともに、名号を本尊とした。二字目の「无」は「無」の奇字（ふつうと違っためずらしい文字）と説明される。宗祖親鸞も多くこの字を用いた。両脇に綴られる「弥陀の大悲ふかけは・・・」は、親鸞撰述「淨土和讃」（118首）のうちの一首。

# 浄土真宗の村・新倉

正福寺・如来寺・大正寺の「三箇寺」がある富士吉田市の新倉（江戸時代には新倉村）は、入山川に沿う古屋入と二つの新田村落（新町・旭町）からなる。現在三箇寺は、谷の開口部西方の高台に位置するが、その前面（東方）には、かつて小舟山と呼ばれる丘陵が御坂山地の支脈から延びていた。これにより、古屋入は剣丸尾溶岩による災を免れた。

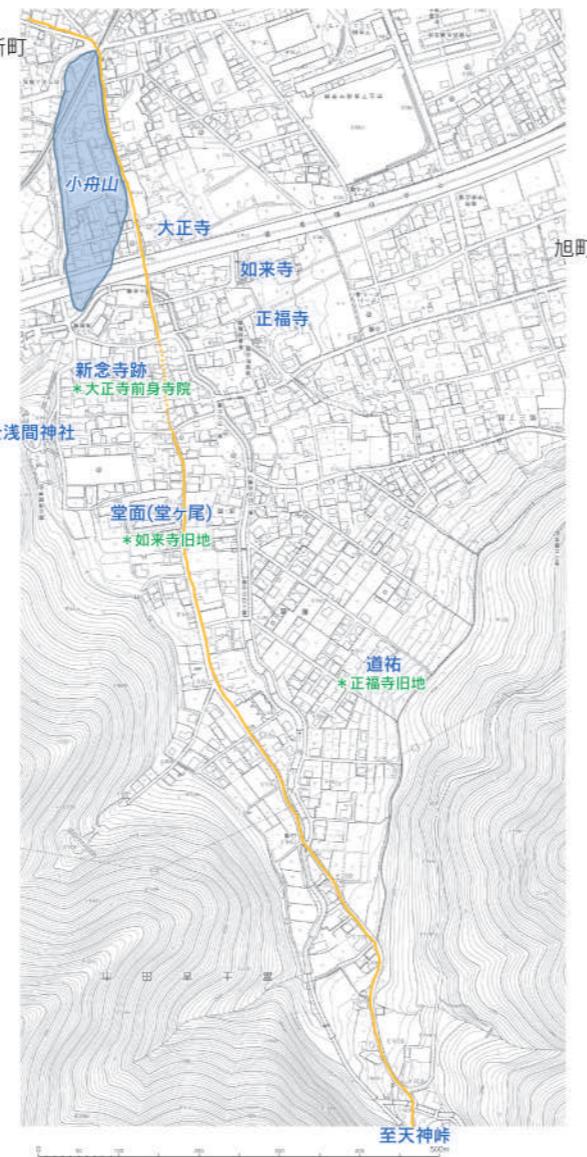
農地は畑が中心で、ここに新田村では用水の確保に苦労した。女性を織手とする機織が盛んで、明治以降も「上質な絹を織るために女に百姓仕事はさせなかった」という手の保護が図られていたのである。一方、男性には耕作以外で薪や肥料を採取する仕事があった。そのため富士山の裾野や川口山には周辺の村々と共同で使う入会地がある。富士の裾野では薪のほか、家屋用の木材、用水路用の樋木など村で必要な資材を探る。このうち薪を谷村陣屋へ納める役も負っていた（後には錢で納めた）。川口山へは川口村（富士河口湖町河口）・上暮地村（富士吉田市）と共に、馬の飼料の秣などの採りに入った。御坂峠の辺りまで行ったという。河口湖方面への山道は生活上、欠かせない道であった。

伝承では浄土真宗の祖・親鸞が富士北麓を訪れたとき、明見・吉田・新倉（以上、富士吉田市）を通り、河口湖畔の浅川（富士河口湖町）に至ったという。寛文4年（1664）、新倉村は愛染地蔵堂（下吉田村）経由で東方の小明見村へ向かう「あいせん之道」について下吉田村と協議し、両村共同で道の修繕にあたることを取り決めている。かつて親鸞が通ったとされるルートは、川口山方面への入会道と合わせて、江戸時代も道として機能していた。

新倉のほとんどの家は「三箇寺」を檀那寺とする真宗門徒である。そもそも一つの村に、真宗寺院が三つあるというのは珍しい。新倉では「三箇寺」の住職の家（寺族）を中心とする「イッケ」が拡大し、同族として門徒集団を形作った。「三箇寺」はそれぞれ協力し合い行事を執行する。門徒の集まりである「講」も、例えば二十八日講のように「三箇寺」合同のものが見られる（下吉田の福源寺が加わる場合もある）。また、毎年、本願寺門主に絹織物を献上した。新倉の人々は「三箇寺」の下で、門徒の村を形成してきたのである。

## 新倉の集落

新倉の地名は空海がルーツという伝承がある。空海が富士山から当地を眺めた時、もしくは「阿ノ山」に登って富士山を見た時に噴煙で暗かったので「あら暗い」と言い、それが「阿良暗」という地名になったと伝わる。江戸時代の新倉は貢享年間（1684～88）の開発により下宿（新町）、享保年間（1716～36）の開発で上新田（旭町）、それぞれに新集落ができた。これらに対し、当初の集落は古屋とよばれた。水掛けの畑で麦を作り、他に粟・稗・大豆・小豆・蕎麦・大根などを栽培した。明治以降は馬鈴薯の栽培が盛んになり、新倉柿や新倉大根といった特産も出現する。



\*「富士吉田市都市計画基本図」No. 7・12（2016年修正）に加筆した。その際、富士山の方向を上方に示すため、南北を逆転させた。

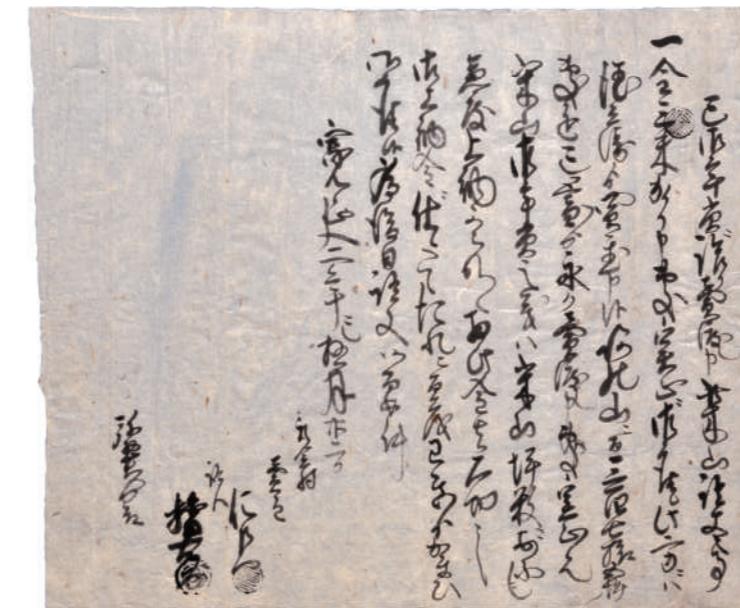


新倉三箇寺

東方（写真左）から、大正寺・如来寺・正福寺と並ぶ。大正寺と如来寺の間を、中央自動車道が貫いている。鐘の音が聞こえる区域を「鐘下」といい、新倉の人々にとって三箇寺は日常生活に溶け込んでいる。浄土真宗の寺院を中心に成立した寺内町的な真宗村落が新倉である。かつては三箇寺それぞれの境内や門前に、「前寺」と呼ばれる子院があった。



如来寺境内から見た古屋入の集落



14柴山売渡証文

寛延2年（1749）

「阿の山」内の375坪を金3朱で売り渡す事を約した証文。柴山年貢を坪数に応じて納めることを明記してある。新倉村では田に柴を入れて、肥料としたが、その柴の利用に対して米1石1斗4合の柴山年貢を課された（のちに金納）。柴を採取する場所は阿ノ山・大久保山・深久保山などであった。阿ノ山は、空海が「あの山に寺を作れ」と言い、弟子の道淨が正福寺のルーツ富北院を開いたと伝わる場所である。信仰に関わる山だが、人々の生活を支え、土地の権益も生じていた。ちなみに河口から新倉へ抜ける山越え道は、河口側は天神峠、新倉側は阿ノ山峠と呼んだという。

已御年貢ニ詰リ売渡し申柴山証文之事
一金三朱かり申處實正ニ御座候、此方ニハ
德兵衛より買置申候阿の山ニ而三百七拾五坪
處を已暮より永ク売渡し申處實正也、
柴山御貢之義ハ柴山坪數ニおふじ
急度上納可被成候、扱此金者大切之
御上納金ニ仕候へ、たれニ而茂わきよりかまひ
（無脱カ）御座候、為後日証文仍而如件
寛延二年已極月廿二日
新倉村 売主 弥惣右衛門殿
証人 仁左衛門印 播磨右衛門印

縦26.4cm×横30.5cm

# 新倉浅間神社と富士山

「三国第一山」の額が鳥居にかかる新倉浅間神社は古い由緒を持つ。平安時代初期に富士山が噴火した時、朝廷は勅使をここに派遣して、鎮火の舞を舞わせたと伝わる。創建はそれ以前の文武天皇（在位697～707）の時代ともいう。江戸時代には新倉村の産土神として、村人を見守った。

現在、毎年8月26・27の両日行われる「吉田の火祭」は、浅間神社とともに諏訪ノ森に鎮座する諏訪神社（現在では北口本宮富士浅間神社の摂社）の大祭で、旧暦の時代には7月21・22日に執行されていた。江戸時代には、新倉村から富士山の形をした神輿を出した。三角の板（なけ・なげし）で作っていたが、享保年間（1716～36）には紙でこしらえた。そして雪を表現する真綿（「雪綿」という）を付ける。そして神主・村役人・氏子総出で村を回り、上吉田まで行った。新倉村の若者連中は、そのまま祭礼に参加し、神輿の片方の担ぎ棒を担いだ。

江戸時代後期に新倉浅間の神主が上吉田へ引っ越してからは、雪綿だけをその神主か、諏訪神社神主の大玉屋（佐藤氏）に納めるようになった。しかし、富士山型の神輿は消えることなく、その後も担がれ続けている。



オヤマサン（御山神輿）

2019年8月撮影

北口本宮富士浅間神社蔵

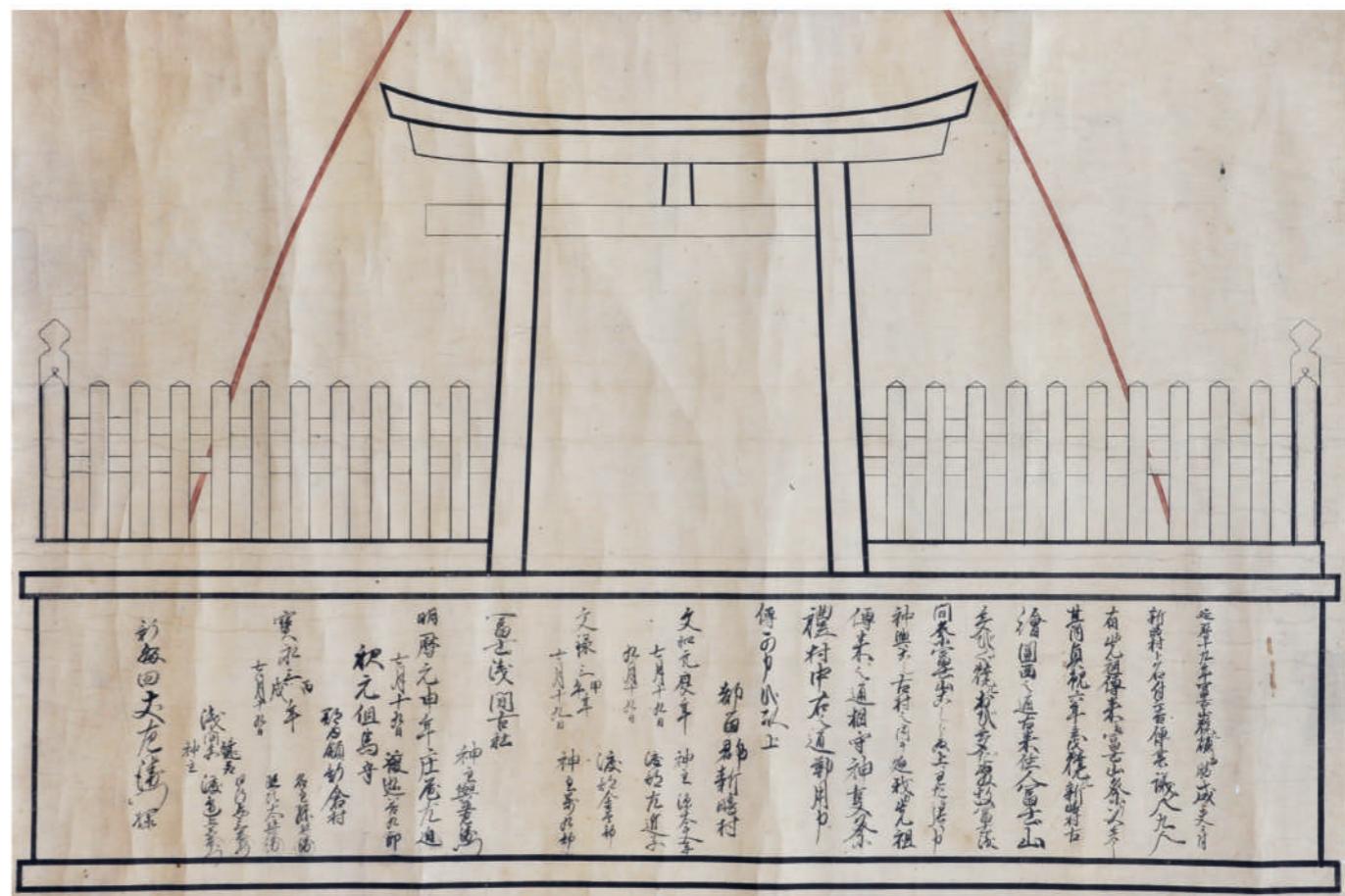
写真提供：CATV富士五湖

普段は北口本宮富士浅間神社の摂社諏訪神社の拝殿に設えられた神輿庫に安置されている。8月26・27の両日執行される「火祭」に担ぎ出され、渡御の途中で地面に3回落とされる。総重量は、1トンにも達するという。江戸時代の中頃までは、新倉村で造って吉田まで運んでいたが、いつしか吉田に常置されたようになった。「移った」とも「貸したまま」ともいわれているが、事情は明らかでない。

## 富士浅間神社

富士吉田市新倉

大同2年（807）もしくは貞觀6年（864）の富士山の噴火の時、朝廷からの勅使が鎮火のため舞を舞ったといわれ、勅使が持つて来た天狗面・勅使面、金の御幣などが社宝として伝えられることになった。「三国第一山」の勅額を賜ったのもこの時という。もともとは小舟山（消滅）に社があり、尾垂山の中腹に移ったとされる。現境内社の荒浜神社がそれで、「ゴインキヨサマ」と呼ぶ。御神体は「オタマシイ」というホタル石で、布が巻かれている。60年ごとに布を取り替える「オシメカエ」を執行するが、神主が落としそうになると手をひっかくといった、気の荒い神とのエピソードもある。新倉村の産土神であり、村が神社の管理運営に積極的に関わった。社の鍵の管理は、代々「宮渡辺」という家が担い（江戸時代には村の名主が管理した時期もあった模様）、正福寺・如来寺を含む14家が祭礼の費用を出していた。



新發田丈左衛門様	鍵取	浅間宮 渡辺与五左衛門	神主	神主源太夫子	都留郡新暗村	渡部金壱郎	延暦十九年富士山焼ル煙ニ而暗成、夫ニ付 其内貞觀六年ニ茂焼ル、新暗村古 繪圖面之通 古來住人富士山 たびたび焼ルおびただ敷故、富士浅 間祭富士山こしらゐ、上二わたヲ張り申 神輿こし、右村之内ヲ廻、我か先祖 伝來之通相守、神事祭 礼村中右之通勤用申 伝可申候、以上
			神主万九郎	神主与五左衛門	庄屋左近	渡辺善九郎	
			組頭太兵衛	名主孫兵衛			
			同断与三左衛門				
宝永三丙年	七月十九日	秋元但馬守	神主源太夫子	源太夫子	源太夫子	源太夫子	延暦十九年富士山焼ル煙ニ而暗成、夫ニ付 其内貞觀六年ニ茂焼ル、新暗村古 繪圖面之通 古來住人富士山 たびたび焼ルおびただ敷故、富士浅 間祭富士山こしらゐ、上二わたヲ張り申 神輿こし、右村之内ヲ廻、我か先祖 伝來之通相守、神事祭 礼村中右之通勤用申 伝可申候、以上
明暦元申年	七月十九日	富士浅間古社	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	
七月十九日	明暦元申年	神主源太夫子	源太夫子	源太夫子	源太夫子	源太夫子	
神主源太夫子	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	渡部左近子	
庄屋左近	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	
名主孫兵衛	神主与五左衛門	神主与五左衛門	神主与五左衛門	神主与五左衛門	神主与五左衛門	神主与五左衛門	
組頭太兵衛	庄屋左近	庄屋左近	庄屋左近	庄屋左近	庄屋左近	庄屋左近	
同断与三左衛門	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	渡辺善九郎	

## 13御山神輿由緒書

宝永3年（1706）

甲斐国が柳沢吉保の支配にあった時代に寺社の調査があり、新倉村の浅間神社の神主と村役人が係役人の新發田丈左衛門に出した由緒書。祭礼になぜ富士山の形をした神輿を出すようになったのか、その由緒を報告している。新倉村の名称は、延暦19年（800）の噴煙で暗くなったから付けられたこと。そして富士山の祭が行われるようになり、貞觀6年（864）の噴火を経て、富士山型の神輿を作り、真綿を乗せるようになったという。この由緒書の文面は文和元年（1352）を始めとして、何回か作成されたらしく、神輿の歴史の長さを物語っている。さらに神輿の図が載るが、富士山の上が切れているのは、その高さを強調するためか。

富士浅間神社（新倉）蔵

縦58.5cm×横86.7cm

# 新倉三箇寺



大正寺



如来寺



正福寺

## 企画展「富士山と鎌倉道－御山の入口・新倉－」展示資料

No.	資料名	年代	所蔵者	掲載頁
1	桑田紫水画「御堂寺改宗」	昭和40年(1965)	蓮華寺	6
2	八葉九尊図版木	延宝8年(1680)	正福寺	16
3	富士山八葉九尊図版木	延宝8年(1680)	正福寺	17
4	富士山略縁起版木	延宝8年(1680)	正福寺	17
5	富士山牛玉宝印版木	延宝8年(1680)	正福寺	14
6	銅造聖徳太子騎馬像	江戸時代(18世紀後半)	如来寺	12
7	木造聖徳太子騎馬像	寛政8年(1796)	如来寺	13
8	浅野氏重判物	文禄4年(1595)	正福寺	15
9	鳥居成次判物	慶長9年(1604)	正福寺	15
10	富士山御縁年につき正福寺建札下書	寛政12年(1800)	正福寺	16
11	准如筆「六字名号」	江戸時代(17世紀前半)	大正寺	18
12	絹本著色准如上人御影	寛永13年(1636)	大正寺	19
13	御山神輿由緒書	宝永3年(1706)	富士浅間神社(新倉)	23
14	柴山壳渡証文	寛延2年(1749)	個人	21
15	浅川村門徒志納帳	元文2年(1737)	如来寺	11
16	如来寺飛檐列座の儀につき金子調方連判状	享保2年(1717)	如来寺	10

## パネルによる展示

17	遊行上人縁起絵 卷第8	室町・江戸時代(15~17世紀)	神奈川県・清淨光寺	7
18	芙蓉亭蟻乗「富士日記」	文政6年(1823)	国立国会図書館	9

山梨県立富士山世界遺産センター

令和2年度 第一回企画展

## 富士山と鎌倉道－御山の入口・新倉－

協力者(順不同)

正福寺、如来寺、大正寺、蓮華寺、富士浅間神社(新倉)、ふじさんミュージアム、CATV富士五湖

清淨光寺(遊行寺)、遊行寺宝物館、国立国会図書館

杉本悠樹、中村 力、村石眞澄、渡辺 稔

本誌は企画展「富士山と鎌倉道－御山の入口・新倉－」(令和2年7月22日～9月22日)の概要を紹介した展示解説です。展示物以外の資料や景観などについても写真を掲載しています。写真解説に付した算用数字は、展示資料の資料番号です。執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(金子誠司・堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当しました。

令和2年(2020)年7月22日発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 0555-72-2314

印 刷 株式会社 少國民社

〒400-0851

山梨県甲府市住吉1-13-1

TEL 055-226-2125